

中国における IER および INSARAG アジア太平洋地域訓練について

四川大地震からの復興と、今後の国際捜索救助チームの受入に向けて



国連人道問題調整事務所 (UNOCHA) Field Coordination Support Section 沖田陽介

1. はじめに

世界の各国で発生した災害に対して派遣される国際捜索救助チームのネットワークである、国際捜索救助諮問グループ (INSARAG: International Search and Rescue Advisory Group) は、1988年のアルメニアにおける地震への対応等の反省から1991年に設立され、現在その事務局は国連人道問題調整事務所 (UNOCHA: United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs) ジュネーブ本部の Field Coordination Support Section (FCSS) に置かれている。

2014年8月下旬、中国の北京において、中国国際捜索救助チーム (CISAR: China International Search and Rescue Team) の INSARAG 外部再評価 (IER: INSARAG External Reclassification) が実施された⁽¹⁾。また、これに引き続き、2008年の四川大地震で被害を受けた成都において INSARAG アジ

ア太平洋地域訓練が実施された。

四川大地震では日本の国際緊急援助隊救助チームが中国に派遣され、東日本大震災では中国の CISAR チームが日本に派遣されており、大規模災害が発生した際には、中国と日本はその距離的接近性からも、互いに国際緊急援助を提供し合う関係である。

本稿では、四川大地震後にさらに強化された中国 CISAR チームの IER および INSARAG アジア太平洋地域訓練の報告を通じ、INSARAG の諸活動について紹介したい。

2. 中国国際捜索救助チーム IER (北京)

INSARAG が 2005 年より実施しているのが、各国の国際捜索救助チームをその規模や能力、INSARAG 手法への習熟度に応じて「軽・中・重」レベルに分類する INSARAG 外部評価 (IEC: INSARAG External Classification) である。中国 CISAR チームは 2009 年に「重」レベルに分類されたが、IEC より 5 年が経過したため、2014 年に再評価 (IER) が求められたものである。日本の国際緊急援助隊救助チームも 2010 年に「重」レベルに分類されており、2015 年 3 月に IER を予定している。本稿執筆時点で、世界の約 40 のチームが「中」または「重」レベル認定を受けている。

IEC/R で認定を得るためには、INSARAG で開発されたマーキング⁽²⁾や統一フォームの使用といった INSARAG の手法について習熟していなければならない。そのため、2005 年の IEC 開始以降、IEC 受検を経ることで各チームの INSARAG 手法に対する習熟度は確実に高まっているといえる³⁾。

表1 日程表

日付	活動内容	場所
8月24日	IER 評価員会議・訓練サイト視察	北京
8月25日	CISAR チーム・プレゼンテーションおよび資機材倉庫等視察	北京
8月26日	IER 36 時間演習	北京
8月27日	IER 36 時間演習 (前日より継続)	北京
8月28日	IER レポート発表後、成都へ移動 四川大地震復興プロジェクト視察	北京 成都
8月29日	INSARAG 訓練 (ワークショップ)	成都
8月30日	INSARAG 訓練 (シミュレーション演習)	成都

北京郊外にある NERSS (National Earthquake Response Support Service) 訓練施設は、実際にビルを建設した後に破壊することで、地震災害に対する現実的な救助訓練を可能としたもので、世界でも有数の規模となっている。CISAR チームの IER は、この NERSS 施設を用いて実施された。



写真1 北京郊外にある NERSS 訓練施設全景

IEC/R 受検チームは、チームの概要や派遣システムに関するプレゼンテーションを実施する他、36時間連続の捜索救助演習を実施し、IEC/R チェックリストの全ての項目において最低限の基準を満たさなければならない。IEC/R 評価員の役割は、プレゼンテーションにおける質疑応答や36時間演習の視察を通じて全てのチェックリスト項目について確認し、さらなる改善の余地があると認められる場合は、これに関するレポートを執筆することにある。評価員は INSARAG に加盟しているチーム、特にすでに「中」または「重」認定を受けたチームの中から選抜されている。2009年のIECに参加した評価員のうち数名が今回のIERにも評価員として参加した⁽³⁾。

IERでは2009年のIECの際に評価員から提出されたレポートに基づき、改善の余地があると判断された部分に特に着目して再評価を行う。2009年のIEC以降、CISARはハイチ地震(2010)、ニュージーランド南島地震(2011)、東日本大震災(2011)等に派

遣されており、またINSARAGの各種活動に積極的に貢献していること、チーム能力向上のための継続的な努力を行っていることが評価され、引き続き「重」レベルを維持することが認められた。



写真2 捜索救助演習の様子(青のベストが評価員)

3. INSARAG アジア太平洋地域訓練 (成都)

(1) 四川大地震復興プロジェクト視察

8月28日、INSARAG アジア太平洋地域訓練に先立ち、四川大地震復興プロジェクトの視察ツアーが実施された。筆者は28日まで北京に残り IER 運営にあたっていたため、同復興プロジェクト視察には参加できなかったが、訓練参加者の多くが映秀、水磨2地区の視察に参加した。

(2) INSARAG 手法を用いたシミュレーション演習

8月29日、30日の両日は、INSARAG アジア太平洋地域訓練が16カ国、140名以上(中国からの参加者を含む)の参加を得て実施された。29日は中国および成都における災害対応マネジメントの紹介のほか、INSARAG 概要、INSARAG で開発されたマーケティングシステムやフォームの紹介がワークショップ形式でなされた⁽⁴⁾。

中国からのプレゼンテーションでは、国、省、市レベルでどのような災害対応システムをとっているかの紹介がなされ、特に2008年の四川大地震における

事例が紹介された。INSARAG 加盟チームの中には自国において地震災害の経験が少ない国、また国際支援の提供はするものの、受け入れた経験を持たない国もあり、被災国つまり支援受入国からの視点は、支援国にとっても非常に有益なものである。

翌 30 日は、四川省で大地震が発生したとの想定のもと、各国捜索救助チーム、また UNOCHA がニーズアセスメントおよび国際支援の調整のために、大規模災害発生時に派遣する国連災害評価調整チーム

(UNDAC: United Nations Disaster Assessment and Coordination) の被災地空港到着から、到着空港において国際チームの受入支援にあたる RDC

(Reception Departure Centre) の設置、被災地域において国際支援調整を実施する OSOCC (On-Site Operations Coordination Centre) の設置、国際捜索救助チームの調整等について、シミュレーション演習が実施された⁽⁵⁾。



写真3 シミュレーション演習の様子

(OSOCC における LEMA と UNDAC の会議)

演習のシナリオは、8月29日午後4時8分、マグニチュード8.0の地震が発生したとの想定で、29日のワークショップ終了時に地震発生のアナウンス、翌30日早朝から国際捜索救助チームが被災地空港に到着し始め、次々と情報がアップデートされる中で、UNDAC や国際捜索救助チームが OSOCC での調整

を行いつつ、アップデートされていく情報に基づき国際チームの役割分担等を行い、いかにして被災国政府と、現地における対策本部(LEMA: Local Emergency Management Agency)を支援できるか、という演習内容である。前日に紹介された INSARAG マーキングやフォームがこの演習で使用された。

今回の演習では、最初に被災地空港に到着した日本およびニュージーランドのチームが RDC を立ち上げ、後続の捜索救助チームの空港における登録を実施。

LEMA との協議を通じて、4地域におけるアセスメント活動を各チームが実施した。演習では4つの部屋を各地域(セクター)と仮定し、各部屋には2008年の四川大地震の際に撮影された崩壊建物の写真が十数枚掲示されており、近隣住民等を演じる演習管理者から与えられる情報をもとに、どの建物において捜索救助活動の必要が高いのかを判定していく。この過程で、各建物にマーキングを施し、統一フォームを用いて OSOCC での報告に使用することで INSARAG 手法を学んでいく。



写真4 シミュレーション演習の様子

(崩壊建物の写真を用いたアセスメント演習。

演習管理者から崩壊建物についての情報を収集する。)

先に述べたとおり、IEC/R を通じて各チームの INSARAG ガイドラインへの習熟度、また INSARAG

手法の定着度は確実に上がっている反面、2011年のニュージーランド南島地震等、実際の災害時におけるINSARAGマーキングの間違った使用例が報告されていることもあり²⁾、今回実施された訓練等を通じて、各チームが確実にINSARAG手法を実施できることを徹底していく必要がある。また、今後IECを受検しようと考えているチームや、IERに向けて常に能力の向上、またはその維持を考えているチームにとって、INSARAG訓練はINSARAG手法について学ぶ、また意見を交換する場所ともなっている。INSARAGでは2010年のハイチ地震での反省を受け、マーキングおよびフォームの改訂を行っている最中であり、INSARAG訓練において新しい手法を試し、被災地での実際の使用に向けて各チームが習熟し、さらなる改良を加えているということも付記しておきたい。

4. おわりに

INSARAGの目的は、国際捜索救助チーム間で調整のとれた活動をとることで、可能な限り被災地に負担をかけることなく、INSARAGコミュニティ全体で可能な限り多くの要救助者を救うことにある。この意味で、中国がIER、INSARAG訓練を開催したことは、INSARAGの活動に貢献するという点で非常に評価されるべきものである。上述のとおり、被災国の視点からの発信、災害からの復興の過程を紹介することは、世界の国際捜索救助チーム、特に自国で地震災害の経験が乏しい国にとっては特に重要なものであろう。

東日本大震災では日本も国際支援を受け入れたが、国際緊急援助の提供国であり、かつ受け入れた経験もある日本から世界に向けた発信も必要とされている。

INSARAGでは毎年地域会合、地域訓練を実施しており、日本はアジア太平洋地域に参加しているが、2015年10月には全ての地域を対象とした、第2回INSARAGグローバル会合を、アラブ首長国連邦のアブダビにおいて開催することを予定している⁽⁶⁾。この第2回グローバル会合では、INSARAGガイドライン改訂版のリリース、2016年にトルコで開催される

世界人道サミット (World Humanitarian Summit)⁽⁷⁾ に対するINSARAGからの貢献、INSARAGグローバル議長選出等が予定されている。

補注

- (1) IERの内容については、『復興』第5号「ロサンゼルス消防におけるINSARAG External Reclassification (IER) 報告」(2012)において、米国ロサンゼルス消防のIERについても紹介している。
- (2) 各チーム間の捜索救助活動の重複を避け、円滑な活動を行うために、捜索救助活動の結果について建物にマーキングを施し、後続チームに情報を伝えるもの。
- (3) この点に関し、日本も評価員の派遣で貢献している。2009年のCISARチームのIECでは、筆者が日本の国際緊急援助隊からロジスティクス分野の評価員として派遣され、IERでは日本から勝部司氏が同じくロジスティクス分野の評価員を勤めた。今回のIERでは日本の他に、シンガポール(チームリーダー)、オーストラリア、チェコ、韓国、ノルウェー、スイスから評価員が派遣された。うちシンガポール、チェコ、ノルウェーの評価員はIEC時にも評価にあたった。(筆者はIEC時には評価員として、IERではINSARAG事務局としての参加であった。)
- (4) INSARAGのマーキング手法や統一のフォームについては、INSARAGウェブサイト (<http://www.insarag.org/>) に掲載されているINSARAGガイドラインで確認することができる。
- (5) これらの被災地における国際緊急援助調整については、柳沢香枝編著『大災害に立ち向かう世界と日本：災害と国際協力』(2013)も参考になる。
- (6) 第1回INSARAGグローバル会合は、2010年に兵庫県神戸市において開催され、INSARAG兵庫宣言の署名が行われた。
- (7) <http://www.worldhumanitariansummit.org> を参照頂きたい。

参考文献

- 1) 沖田陽介(2013), 国際都市型捜索救助に関する一考察, 地域安全学会論文集, No.19, pp.1-8.
- 2) Glassey, Stephen (2013), Analysis of urban search and rescue markings applied following the 22 February 2011 Christchurch earthquake, Journal of Search and Rescue, Vol.1, Iss.1, pp.29-49.